月下美人

ハレルヤ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月下美人

【Ｎコード】
Ｎ９６７１Ｎ

【作者名】
ハレルヤ

【あらすじ】
大都会の月明かりの下、不思議な白い煙をみつけた。それが何であるのか？

プロローグ

ここ数日、熱帯夜が続いている。

高速沿いの古い高層マンションの最上階に住んでいる私には心を癒す緑も無く、自然と薄着の原始人スタイルに定着している。

冷蔵庫から安い発泡酒を取り出し、グビリとのどに流し込みながら、ベランダへと出た。

多少の風は流れているが相変わらず排ガスの臭いは漂ってくる。

それでも昔に比べれば、臭いは少なくなったかもしれない。

夜空にはスモックで霞む月が丸い窓のように浮かんでいる。

眼下に広がる高速も日付が変わるころになるとさすがに車の数も少なくなっている。

遠くに東京タワーが見えることが唯一の自慢の我が家だが、ここ数年、いやもっと、女っ気の無い生活をしているせいか、ロマンティックの欠片もない生活が続いている。

高速を流れる車を目で追った。

気が付くと何か白いものが見えた。

それは遠くにあって形が何であるのか、わからなかったが、それが動いていることはアルコール漬けの脳みそも理解できていた。

一夜

「なんだ？あれは」
車がすぐそばを通り過ぎていく。
ドライバーには見えていないのか？それとも幻覚か？
あまり恐怖感を感じなかった私はつい面白半分にタカシに電話した。
「今どこ？」
「公園に居るに決まってる」
タカシは車をドレスアップするのが趣味で夜はどこかの公園の駐車場で自慢の車をサカナに仲間とわいわいやっている。
「今からうちに来ないか？」
「何でだ」
「いや面白いものが見えるから」
それを聞くと二つ返事で「行く」といった。
私は来る途中で高速に乗ってくるルートを勧めた。ちょうどタカシもそのルートで来るつもりで居た。私はしばらくぶりに来る友に対して本物のビールを冷蔵庫に並べた。
タカシが来るまで私は窓際においてある双眼鏡を手に取り、例の白い煙を観察した。
水蒸気や何かが燃えてできた煙とは異なり、密度が濃い。形も丸くなったり細長くなったり。
しばらくするとタカシの車が見えた。でっかいアメ車で度派手なネオンをつけて走っているからすぐに分かる。
白い煙の横を通り過ぎていく。
一瞬、白かった煙がネオン色へと変わる。
しばらくして、玄関のチャイムが鳴った。
扉を開くとタカシの姿があった。背は低めで痩せ型。何であんなにでかい車に乗っているのか不思議に思ったことがある。
タカシは私に断ることも無く冷蔵庫の中のビールを取り出していた。

二夜

ビールを飲んで一息しているタカシに双眼鏡を手渡し言った。
「あそこのゼブラゾーンのところ、見てみろよ」
指差す方向に目を向けるタカシ。
「なんだ、ありゃ」
私は自慢げに言った。
「なっ、面白いもんが見れただろう」
しばらく、それを見つめていたタカシが「俺が通ったときにはあんなもんなかったぞ」とつぶやいた。「幽霊かな」
「バカ言うんじゃないよ、まったく」
怖がりのタカシはぶるっと身震いした。
満月の月明かりが辺りを青白く照らしている。
タカシと私はしばらくその白い煙のようなものを眺めながら酒盛りをした。
「事故で死んじゃった女の幽霊だよ」
「いや、あそこで幽霊が出るなんて聞いた事が無い」
「幽霊じゃなきゃ、なんだよあれは」
「そんなの俺にわかるわけ無いだろ」
二人の会話は夜空に吸い込まれていくだけだった。
午前二時をまわった頃、タカシが叫んだ。
「おい、なんか変だぞ」
双眼鏡をタカシの手から奪い取ると私は覗き込んだ。
形が変わっている。今までのような不特定なものでなく明らかに人間っぽい感じだ。
「やっぱり、幽霊か？」
今度はタカシが悲鳴のようなものを上げた。

三夜

その白い煙のようなものは形を変えて、高速の上を舞うように動き始めた。
次第に私の居るマンションとの距離が近くなってきた。
タカシはすでに私のベットルームへと姿を消している。布団を頭からかぶっているのだ。
白い煙は白い塊になってなおも近づいてくる。
不意に冷たい風が吹いてきた。辺りを照らしている青白い光が消えていく。
街の信号機や車のバックライトの赤い色、建物の隙間から漏れて見えるネオンの木漏れ日。
厚い雲が月を隠したのだ。あの白い塊も夜の闇に消え去っていた。
しばらくすると、ポツリポツリと雨が降ってきた。
夜の街は少し熱帯夜から開放されるようだ。
タカシはあのまま布団をかぶったまま、朝を迎えることになった。
お陰で私はソファーでごろ寝だ。
朝日が顔を出し、辺りが明るくなるとタカシは部屋から出てきた。
目の下のクマが痛々しい。思わず、笑った。
タカシはそのまま朝食も取らずに出て行った。
私はトーストしたパンにたっぷりのバターを塗り、口にくわえながらベランダに出た。
昼間の高速は戦場のように五月蝿い。夕べ、例の白い煙を見かけた場所を見た。
いつもと変わらず、車が通り過ぎている。
「あれはなんだったんだろう」
首を傾げながら私は部屋に戻った。雨上がりの朝はすでに蒸し風呂の兆候を示していた。

四夜

あの珍事から数日が過ぎた。
毎晩のように例の場所を観察するが、あれ以来何も起こらない。
相変わらず、暑い毎日が続く。
しょうもない仕事から帰るといつもの原始人スタイルになって発泡酒を飲んでいると、マリから電話がかかってきた。
「ねえねえ、タカシに聞いたんだけど幽霊が見れるってほんと？」
マリはタカシの彼女的存在で同棲しているのだが、結婚なんてめんどくさいといっているちょっと変わった女だ。
「あれからは見てないよ」
私が答える。
「な～んだ。暇だから行こうかなと思っていたのにな～」
そんな声を聞いて私はふと思った。
あの場所を見に行きたい。
しかしそこは高速の出口のゼブラゾーン。車じゃ無理だが、マリのバイクなら何とかなるかも。
私はマリに家に来るように言った。
マリも興味が沸いたようだ。
「よ～し、今から行くね～」
電話を切ると私は服を漁った。裸同然の今の格好では外出できないからだ。
マリのバイクの音が遠くから近付いてくるのがわかる。
ハーレーの独特の排気音。
デニムのパンツに厚手の長袖シャツに着替えた私はマンションの一階へと下りていった。
マンション前にはすでのマリが到着していた。
「相変わらず、ダサい格好だね」
マリはヘルメットを私に投げてよこしながら言った。

「それは私の勝手でしょ」
ヘルメットをかぶると私はマリのバイクに跨った。
「じゃあ、行くよ」
爆音を轟かせながらマリのバイクが走り出した。

五夜

マリのバイクは高速とは逆方向へ向かっていた。
「どこに行くの」
マリは笑っていった。
「なに言ってるの。C1はバイクの二人乗りは出来ないのよ」
「えっ」
私は本当にびっくりして声を出した。
「だって、高速の二人乗り解禁とかニュースで言っていたよ」
マリはため息をつきながら答えた。
「それはほんの一部の区間だけ」
マリのバイクは見覚えのある店に吸い込まれていった。バイクショップ　マーリー。
バイクを降りるとマリはずかずかと店の奥へと向かった。
つなぎを着た従業員は頭を下げながら「社長、お帰りなさい」と口々に言った。店に居た常連からは「マーリー、お帰り」と声をかけられる。
これでも、マリはハーレー専門のバイクショップの社長なのだ。
そして、私と悪い遊びをした同級生でもある。
マリは店の奥から戻って私にキーを投げ渡した。
手招きで店の裏手にある倉庫へと向かう。
ここにはお店の在庫の他にマリのコレクションも多数置いてある。
その一角にシートを被ったバイクが一台。
シートを取り去るとそこにはハーレーではないバイクが置かれていた。
「ドカティー？」
ハーレー専門店になんでドカが？それも１１９８Ｒ。５００万もする生粋のレーサー。
「いいでしょ。あんたのためにとって置いたんだから」

なんでも、同業のバイク業者が借金のかたに押さえた物らしいが、現ナマでほっぺたをちょっと叩いて、手に入れたという。
私も昔はマリとつるんでよくバイクで遊んでいたが、最近はさっぱりだ。
すでにマリは自分のバイクに跨っている。
「しかたないな」
私は一人でつぶやきながらドカのキーを捻った。
久々に聞くエンジン音は心地よかった。

六夜

久しぶりに乗るバイクは気持ちよかった。
周りの車は美術館のオブジェのように見えた。
右へ左へ。
気が付くとマリの姿は見えなくなっていた。
「まっ、いいか」
私は例の白い煙の立ち上った場所である高速出口のゼブラゾーンにバイクを止めた。
しばらくすると、マリのバイクの音が聞こえ出した。
私は先にバイクから降りて辺りを見回していた。
後ろからマリが声をかける。
「さすが、ホワイトゴースト。腕は落ちていないわね」
私はうなずくだけで、地面のほうに向けた視線はそのままだった。
衝突緩衝の水の入った容器の下で何かが光った。
近付いてみるとそこにはシルバーのロザリオが落ちていた。
雨が降ってきた。
マリと私は急いで高速を降りた。
近くにあるファミレスの地下駐車場にバイクを止める。
拾ったロザリオに興味があるとマリが言うので、食事を取りながらゆっくりとすることにした。
注文が済むとマリはロザリオを手にとり、裏返したり、指で感触を確かめたりしている。
「やっぱり似ている」
マリはロザリオをテーブルに置いていった。
「これ見たことあるの？」
マリはうなずくと自分の首に手を回した。取り外したのは似た形のロザリオ。
「どこで買ったの？」

私が尋ねるとマリは怒ったような顔でいった。
「違うわよ、これは本物のロザリオ。父が昔、教会の神父さんからもらったものよ」
目を丸くしながら聞いた。
「もしかして、カトリック？」
マリは当然という顔をして頷いた。マリの昔の姿を見た主、イエスはなんと嘆いたことだろう。

七夜

マリが二つのロザリオを並べて指差した。
「裏側のこれよ」
そこには見たこともない文字が並んでいる。
「主のお導きがありますように」
マリが呪文のように言う。なんでも、ラテン語でそんな意味のことが書いてあるそうだ。
マリの行く教会の壁にも同じ言葉が書かれているという。
しかし、問題はもう一つの文字。
クロスの横向きに書かれたのがラテン語。
縦にも何か書かれているが、マリにはわからないといった。ここは専門家の意見が必要だとマリが言い出し、明日、その教会とやらへ私も出向く羽目になった。
生まれてこの方、そんなところには行ったことのない私。
マリに説得されて、しぶしぶ約束をしてしまった。
次の日、退屈な仕事が終わるとすぐに家に帰った。
着替えを済ませるとマリの教えてくれた教会へと向かった。
教会の前についてもまだ辺りは明るかった。マリが入り口のところで手を振っていた。
意外に大きめな教会だったことにびっくりした。
中にはいると教会独特の空間が広がっていた。
なんだか、無駄に広いような静寂の鎖がまかれているような。私は苦手だった。
奥の祭壇の所に1人の男が立っていた。すでに初老といった感じで髪の毛には白いものが目立っている。
名前を桜木と名乗った。マリのお父さんの時代からの付き合いだと紹介された。
私はポケットからロザリオを取り出して、裏に書かれた文字のこと

を聞いた。
桜木神父はロザリオを手にとって眺めると二人を祭壇横のドアから奥へと案内をした。
細い廊下を通って、地下へと下った。
教会には意外と知らない部屋が存在することをはじめて知った。
目的の部屋のドアを開けると三人で中にはいった。
そこは本で埋め尽くされた図書館のような部屋だった。

八夜

桜木神父は部屋の奥のほうから古い一冊の本を持ってきた。
「まずは縦に書かれた文字からですね」
本を開くと指をさした。
「これのことだと思いますよ」
意味は皆さんも聞いたことのある言葉です。
「光あれ」
桜木神父によるとこの文字はヘブライ語で旧約聖書の最初の創世記に書かれた言葉だという。
次に手書きの書類をまとめてあるセピア色の封筒から一枚の紙を取り出した。
「そのロザリオはたぶんこれをモデルにした複製か、あるいはオリジナルかもしれませんね」
そこには私の拾ったロザリオと同じ言葉の書かれた銅版画のような絵が描かれている。
「何か特別なロザリオなんですか？」
私が神父に尋ねると頷きながら自分の持っているロザリオを取り出した。
「これは先々代の橘神父が生涯を費やして調べていた天草四郎のロザリオを復元したものだといわれています。しかし、正確な資料はないに等しく、同時代に日本に入ってきたロザリオを基に作ったものなんです」
私は歴史には興味がないが、天草四郎の名前ぐらいはわかる。
しかし、私は疑問に思った。モデルになったロザリオにある縦の文字は何で再現しなかったのだろう？
桜木神父に私の疑問をぶつけた。
「それはある特別な使命を持ったものだけに授けられるロザリオだからです」

「特別？」
「生涯をかけて信仰を広めることです」
今ではもう作られることもなくなり、存在しているのは数本ぐらいだという。桜木神父もバチカンに出向いたときに一度だけ本物を見たことがあるという。
「これはコピー？それともオリジナル？」
私は桜木神父に訪ねる。
「マリさんから聞いた話ではこのロザリオの近くで奇怪な現象を目撃したと聞きました。たぶん、本物ではないかと」
「本物には不思議な力があるということですか？」
神父は「はい」と答えた。
不思議な力の宿るロザリオ。
次は持ち主を探すこと。このロザリオは人間が所有しなければ奇怪現象が出ることがないとバチカンでも証明されているから。
さて、どうやって探そうか？

九夜

教会で桜木神父が別れ際に行った。
「このロザリオは神のお導きであなたに辿り着いたのです。きっと、持ち主とあなたを結びつけることでしょう」
ロザリオの鎖が壊れていたが、マリの知り合いのシルバージュエリーショップで直してもらった。
首にかけてみる。
今までアクセサリーなど付けたことのない私には少し抵抗もあったが、金属独特の冷たい感触というよりは誰かの手が触れているような錯覚を感じていた。
マンションに戻るといつもの生活が戻ってきた。
ベランダに出て、半分にかけてしまった月にロザリオをかざしてみる。あの白い煙が出てくるかと期待してみたが、それは何の変化もなくそこにあった。
そんなロザリオが私の一部になり始めた頃、マリから電話があった。
「出たよ～」
第一声がそれだった。
詳しいことは店で話すといって、勝手に電話は切れてしまった。仕方がないのでマリの店へと出向くことにした。
店の着くとマリが目をきらめかせて待っていた。
「来た、来た。こっちだよ～」
手招きで店の裏の倉庫へと連れて行かれた。そこには例のドカのバイクがある。
マリが被せてあったカバーを取り去ると、真っ白に衣替えしたあのバイクが現れた。
「どうしたの」
私が訪ねるとマリは言った。
「この前、久々にハルの走りを見たら、やっぱりこの色にしなきゃ

と思って、速攻で塗り替えたんだ」
ここで言うハルとは私のことである。マリが話を続ける。
「実はこのバイクがちょっとおかしいことになったらしいんだ」
「おかしいこと？」
何のことだかわからない私にマリは順を追って説明した。
昨夜のことだという。店の従業員が自分のバイクを夜中までいじっていた。すると倉庫から突然、エンジン音が聞こえ始めたというのだ。

十夜

ハーレー専門店だからハーレー以外のバイク音がするのは気になった。
もしかしたら、泥棒？などと思って倉庫を点検しに行ったらしい。
ときどき、バイクを盗もうとする輩がいるらしく、セキュリティーも万全にしている。
警報が鳴った痕跡もない。
すこし、おびえながら倉庫のドアを開くと音は突然消えてしまったという。
この倉庫の中でハーレー以外のバイクはこのドカしかない。
「というわけで、このドカ、ハルが引き取ってよ」
「えっ」
私は言葉を失った。
「だから、従業員が気味悪がっちゃってどうしょうもないのよ。どうせ、ハルにあげるつもりだったし、持ってって」
マリが私に対して太っ腹な理由は初めての出会いにある。そこそこ身長の高いマリだが、ネジの抜けた野郎ども7～8人に囲まれれば、どうしようもない。そんな場面に偶然、居合わせたのが私だった。
それがマリとの始めての出会いだった。
マリはその頃はまだやんちゃをしていて、何人かと一緒にチームを組んでいた。
しかし、いつの世も女だけのチームはいちゃもんを付けられるものだ。
地元のヤバイ暴走族から嫌がらせを受けて挙句の果てマリ自身が標的となったのであった。
気丈なマリに男たちは切れて、ボコボコにされそうになった。
いや少しだけボコボコになったときに運悪く私が通りかかった。
その頃私は力に憧れて空手や柔道などなどいろいろと身に付けてい

た。ただ単に、力というものに憧れていただけだ。
誰かをやっつけようなどとは思ってもいなかった、つもりだった。
だが、致命的な欠点が私にはあった。情けというものが欠如していた。
マリを取り囲んでいた男共は人数×３ほどの骨が折れて地面に転がっていた。マリがとめなければ、その二倍は骨が折れていたかもしれない。
まあ、そんなこんなでマリと友達になり、チームに入ってバイクを乗り回して遊びだした。
敵対するやんちゃ坊主はことごとく病院送りになり、当時私が好んで白いコートを着ていたことから「ホワイトゴースト」の二つ名をもらってしまった。
まあ、遠い過去の話だ。

十一夜

仕方なくバイクを引き取ることにした私にマリが手渡したものがある。

「転ばぬ先の杖だよ」

見るとそれは真っ白なレーシングスーツ。万が一転んでも、これを着ていれば怪我が少なくなるというもの。マリも少しは心配しているんだと茶化しながら受け取った。

マンションに帰るとバイクを地下にあるも物置スペースに押し込んだ。このマンションで唯一自慢のできるのがこの物置だ。鍵もかけられるし、多少大きなものでも入れて置ける。

社会に出てからはバイクに乗る機会はめっきりとなくなった。次にこのバイクに乗るのはいつになるのか。鍵を閉めながらそんなことを考えた。

しかし、意外にその日はすぐ目の前に来ていたことを私は知る由もなかった。

バイクを受け取って三日たったある日。会社で上司の失敗にもかかわらず、私が攻められるという事態が起こった。社会の組織なんてこんなものだとは知ってはいたが、何か釈然としないままマンションに帰ってきた。

部屋の明かりをつけると壁にかけられた白いレーシングスーツが目に入った。

１０分後、私はバイクに跨って夕暮れの街へと吸い込まれていった。夜の帳が更けるにつれて、首都高を這いずり回る車が減っていく。日付の替わる頃、私は何周目かのＣ１の上を走っていた。

昔誰かに聞かれたことがある。

「早く走るってどんな感じなんですか？」

私は答えた。

「フィギアスケートを踊っているようなもの。右に左に華麗に滑る。

そんな感じよ」
その夜の私はまさに踊り続けるスケーターのようだった。目の前にあのロザリオを拾ったゼブラゾーンが見えてきた。
今日何回目だろう。
急に体が軽くなる気がした。
世界がまるで綿菓子で出来ているような。
上も下も右も左もなのもない世界。その後の記憶はない。
目が覚めると何か規則正しく響く電子音、まぶしい光、夏なのに肌寒さを感じる体。誰かが一生懸命何か叫んでいる。
「五月蝿いな〜」
私はまた白い世界へと引き戻されていった。
次に気が付いたときには横にマリがいた。自分が白いベットの上に寝ていることもわかった。
事故った。
すぐに理解できた。体のあちこちに痛みがあったからバカでもわかる。指も足も動く。
「大丈夫だな」
軽症で済んだみたいだ。

十二夜

泣きじゃくるマリをなだめすかし、自分が起こした事故についての詳細を聞いた。
事故の前からまったく記憶のなくなった私はどうしても気になっていた。
事故を目撃していた人によると私の周りに何か白いものがまとわりつき、急にはじけるように光ったあと事故になったらしい。
多少の痛みはあったもののそのほかは別段普通と変わりなかった。
すぐに病院生活に飽きた私は早く帰りたいと駄々をこねてみたが、検査がまだあるといわれ、結局、退院できたのは5日後だった。
退院の迎えに来てくれたマリに連れられて、やっと白い監獄ともおさらばできるんだと思うとうれしくてスキップをしそうになった。
私は浮かれていた。目の前に車椅子が現れたことを気が付けなかった。
マリが「危ない」と叫んではじめてそれに気が付いた。
危うく車椅子ごと転がるところだったが、両手で車椅子を掴んで最悪の事態は避けることが出来た。
それが、ロザリオの導きだとはそのときは思ってもみなかった私だった。

十三夜

ユキエにとって久しぶりの外の空気のはずだった。
付き添いの乳母、サチエさんに車椅子を押してもらい、廊下の角を曲がったときだった。
目の前に誰かが覆いかぶさってきた。ユキエは車椅子に座ったまま身を縮めた。
「あっ、ごめん」
車椅子の前を掴んで体を支えていたその人は答えた。
清楚な顔つきの女性がそこにいた。
ユキエは「大丈夫です」と答えながら、ふと、その女性の胸元を見た。きらりと光るもの。シャツの合わせ目から勢いがついて飛び出したそれは銀のロザリオだった。
後ろにいたサチエさんがそのアクシデントに気が付きあわててユキエの前に歩み寄った。
「大丈夫でしたか、お嬢様」
「大丈夫よ、心配しないで」
そう答えたときには先ほどの女性はすでに消えていた。慌てて周りを見回したが、まだ体の自由が戻っていなかったユキエにとってそれ以上のことは出来なかった。
「ねえ、ばあや。今ここにいた人を探して」
「どうなされました、お嬢様」
「私のロザリオと似たものを持っていらしたの」
乳母のサチエは驚いた表情でユキエに答えた。
「そんなバカなことはございません。今、家のものが総出で別荘を探しておりますが、未だに見つかっていません。まだ、土の中だと思います」
ユキエはそれでも、サチエに頼んだ。
「もしかしたら、月の妖精さんかもしれないの。お願い探して」

乳母のサチエはしぶしぶ辺りを捜しに行くのだった。
ユキエは日本でも5本の指に入る橘コンツェルンの次期総帥であった。
戦後の混乱の中、小さな建材問屋から始まった橘商事は創業者であったユキエの祖父の力もあって、あらゆる業種をその傘下に収めていった。
その後、息子の代になり、海外へと進出も果たした。
しかし、今から3年前、不慮の事故によって幸恵の両親は天国へと旅立ってしまった。
当時、まだ中学生だったユキエは未成年ということもあり、その財産は後見人により成人になるまでは管理されることになった。
今は経営を人に任せ、学業に専念していた。そのはずであった。
それは今年、関東地域を襲った大雨からはじまった。ユキエはうだるような気温の都会から離れ、郊外の別荘で週末を過ごすことが日課になっていた。
来年の大学受験も控えており、できるだけ静かなところで勉強がしたかったということも理由の一つだった。
土曜の夕方に降り出した雨は夜になって土砂降りに変わっていった。
別荘は山の中腹に建っていたが、すぐ裏の山肌が地滑りを起こして別荘をあっという間に飲み込んでいった。
すぐに救助作業が始まったが、降りしきる雨のせいで難航し、ユキエが救助されたのは生き埋めになってから2時間もたってからであった。
奇跡的に怪我はなかったものの、意識不明の重体で近くの総合病院から東京の大学病院へと搬送された。
そのまま、意識も戻らなかったユキエはつい5日前に何事もなかったように一ヶ月ぶりに目覚めた。

十四夜

ユキエにはとても大切にしていたものがある。
祖父から譲り受けた銀のロザリオだ。
ユキエがまだ幼かった頃、祖父にねだったのだ。
祖父は「何かお願い事はあるかい？」とユキエに尋ねるので、ユキエは答えた。
「お月様の妖精さんに会いたい」
祖父は笑っていた。そして、ユキエに言った。
「このロザリオは願い事を叶えてくれる不思議な力がある。今からおじいちゃんがユキエの願いが叶うように御まじないをかけてあげよう」
そう言って、祖父はロザリオをユキエの首にかけて唱えた。
「主の身名において、汝の願いが叶うことを望む」
それからは片時も肌身離さずにいたユキエだったが、大雨の土砂崩れのときにどこかにいってしまった。
それに気が付いたのはユキエの意識が戻ってからだった。すぐに、別荘を探してもらっているが、あれから一ヶ月もたっており依然として見つかっていなかった。
それがまさか、目の前に現れるとは思ってもいなかった。
ロザリオをつけていた女性が月の妖精に思ってしまったのも無理はなかった。
乳母が息を切らせて戻ってきた。
「お嬢様、すでにどこかに行ってしまわれたようで見つけることが出来ませんでした」
私は病院から退院してから、家ですることもなくだらだらとしていた。
会社に連絡を入れたら、強制的に１０日間の有給消化を伝えられた。
まあ、あんな会社いっても行かなくても気にもならないけどね。

退院して2日ぐらいはまあ何とか時間をつぶしていたが、さすがに3日目は暇を持て余してしまった。
ふと、マリといった教会を思い出した。
ロザリオの持ち主とはまだ会うことは出来ていないが、バイクの事故が奇妙な感じだったこともあり、出向いてみることにした。
荘厳な感じの教会は時間の流れに動じないかのようにそこにあった。
人の救いのための建物なのに何か人とは違うものが住んでいそうな。
桜木神父は優しい微笑で私を出迎えてくれた。事故の一件を神父に話したが、軽症だったことが神のなにかしらの啓示だろうと笑って答えるだけだった。
前回は遅い時間に来たが、今回は昼間に来ているせいか、ちらほらと信者らしき人たちが祈りをしていた。
私はカトリック教徒でもないので、祈りをする気にはならなかった。
神父とひとしきり話を済ませると挨拶をして、教会から出て行こうとした。教会のドアが外から開かれた。
そこには白いワンピースを着て車椅子に座る少女の姿があった。
「どこかで見たような」
私はそんなことを思いながら彼女の車椅子の横を通り過ぎようとした。
「すみません。ちょっといいでしょうか？」
車椅子の彼女が私に声をかけた。

十五夜

車椅子の少女は名前を橘ユキエといった。
何でも一ヶ月ほど前の大雨で起きた土砂崩れにあい、こん睡状態から奇跡的に目覚めたのだという。そのユキエが私のロザリオを見て、自分のなくしたロザリオに似ているというのだ。
確かに私はこのロザリオを拾ってはいるが、ユキエの言う別荘と拾ったあの場所は１５０ｋｍも離れた場所だ。
私はユキエに訪ねた。
「このロザリオに書かれた言葉は」
ユキエはラテン語とヘブライ語で答え、そして日本語でこう言った。
「主のお導きがありますように。光あれ」
ユキエの顔を見つめる私。嘘偽りのない表情がそこにあった。
「どうやら、このロザリオはあなたのものみたいね。謹んで、お返しします」
首から取り外したロザリオを私はユキエに手渡した。そのとき、ふと今までの事が気になってユキエに質問をしてみた。
「ところで、このロザリオに出会ってから不思議なことばかり起こったけど、なぜなのかあなたはわかる？」
ユキエは微笑みながら答えた。
「それはたぶんあなたが私の会いたかった月の妖精だからだと思います」
「月の妖精？」
「そうですね。五日後、この教会に来てもらえますか？そうすれば、すべてがわかると思います」
私はユキエに言われるがまま五日後にまた会う約束をした。
ユキエと約束をした日を迎えた。
１０日の強制休暇を終えて会社に復帰した私だったが、以前からあったギクシャク感がよりいっそう増しただけだった。

すでに日は沈み、丸い月が昇り始めている。
教会に着くとすでにユキエは祭壇の前に待っていた。
「どうぞ、ここへ」
ユキエは祭壇の前に私を立たせた。ユキエは車椅子から立ち上がり、おぼつかない足取りで私の前にひざまずいた。
「主よ、私の願いにお答えください」
そう言って、首からロザリオを取り、両手で目の前にいる私見向けて掲げた。
しばらくすると祭壇脇にある蝋燭の炎が少し揺らめきだした。そして、教会のステンドグラスから色とりどりの光がロザリオに向かって集まっていく。
まるで、光の妖精が月の光を集めてくるように。ロザリオが光り輝く。私の体が以前見た白い煙のようなものに包まれていくのを感じた。
光は次第に強くなり、私の背中に集中していった。
ふと、体が軽くなる。
そばに居る桜木神父は自分のロザリオを手にして夢中で十字を切っている。
「大天使ミカエル様」
世界の始まるときに神は言った。
「光あれ」
そして、昼と夜を作られた。昼は神の化身の太陽が、夜は大天使ミカエルの化身の月がこの世を見守っている。
そして、大天使ミカエルは月の妖精ともいわれていた。そんな話をユキエはお爺さんに聞いたことがあった。だから、ユキエはロザリオに願った。
「月の妖精にあいたい」
今、ユキエの目の前にいる私は月の妖精になっていた。背中に生えた翼。それば何よりの証拠だった。ユキエはそんな私を見つめていた。そして、手にしたロザリオを私の首にかけた。

「汝の願いが叶うことを願う」
突然のユキエの行為に私は驚きを隠せなかった。だって、私の願いは、私の願いは叶えられるはずのないものだったから。
私が天使になるよりもずっと難しいそして困難な願い。
ロザリオはそんな願いをかなえるために私のところに来ることになった。
私の天使は満月の夜の期間限定。
それ以外のときは普通の人間のままだった。
ユキエの希望で私は彼女の新しい後見人になった。それまでの会社には未練はまったくなかったし、面白そうだったから引き受けることにした。
まずはユリの父親を利用することにした。ユリの父親は結構古くから続く旧家でお金持ち。その人脈をフルに使ってユキエの会社を動かすことにした。無論、その見返りにユリを結婚するようにけしかけて、数年後には跡取りが生まれたのだから、十分だったと思う。
ユキエは高校卒業後、アメリカの名門大学に進学。勉強というよりも経済界の有名どころの跡継ぎに人脈を作るのが目的のようだ。
その間、変な虫がつかないように乳母がついていったのはいうまでもない。
ユキエは大学を卒業して、橘コンツェルンを正式に引き継いだ。
あれから、百数十回の満月を見上げてきた。
そのたびに背中から生えてくる白い羽。
そして、ユキエと私は結婚をした。無論、法律的には何の意味もないが、彼女は私を受け入れてくれた。
今夜もユキエと一緒に軽井沢の別荘で満月を見上げている。彼女の腕の中には生まれたばかりの娘がすやすやと寝息をたてていた。
私の遺伝子を受け継いだ私たちの子供だ。私の願いは叶った。良きパートナーと自分の子供と暮らす。最先端のクローン技術を駆使すれば出来ないことはなかった。
月の光に照らされた娘はまさに「月下美人」処女受胎の後、この世

に生まれてきた娘。
もしかしたら、将来、世界を救う救世主になるかもしれない。
あの古の物語の主人公のように再びこの世に生まれ人々の魂を救う使命を果たすために。（完）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9671n/

月下美人

2010年11月17日14時05分発行